

みゆちゃんがぼくの心にさいたなつ

関戸 煌樹

「あれ、ママがいない、ママはどこ？」

あれは三年前の八月、ちようど今みたいにセミがミンミンなくころ。朝おきると、となりでねていたお母さんがいなかった。あわてて家中をさがしたけれど、どこにもいない。心ぞうがドキドキした。ペランダでせんたくものをほしていたおばあちゃんがでてきて、ま夏の太ようみたいなまぶしいえ顔をぼくにむけた。

「赤ちゃんが生まれたよ。おめでと、今日からこうちゃんはお兄ちゃんだよ。」

ぼくはなにがおこったのかよく分からなくて、心ぞうはさらにドキドキ、バクバク。手のひらにはあせがにじみ出てきた。

「え。そっか、みゆちゃん。みゆちゃんが生まれたんだ。」

ぼくは、口元がかつ手にうごいてニヤニヤした後、はなのおくがツーンといたくなって、目からなかが出てきた。わらっているのかないているのか分からない、ぐちゃぐちゃの顔のぼく。ふわふわとちゆうにうくような、はじめてのかんかくだった。

みゆちゃんは、ぼくの妹。五さい年下の妹。ぼくがずつとずつとまっていた妹。ぼくは妹がほしかった。お正月にじん社でかみさまにおねがいできた。するとある日、本とうにお母さんのおなかの中へきてくれた。ぼくはうれしくて、おなかの中の妹にうたをうたったり、絵本を読んだりすることが日課だった。

みゆちゃんとはときどき、ぼくよりお姉さんに見える。ぼくがお

やつのおぶどうをたべおえて、もつとほしいと言うと、自分の分を分けてくれる。みゆちゃんの一ばんすきなくだものはぶどうなの。ぼくが出かけるじゅんぴをいつまでもしないで、お母さんにおいていかれそうになると、だいじようぶだよ、とまわってくれる。小さい体なのに、まるでぼくをつつみこむ大きなコートみたい。みゆちゃんといると、ぼくの心がやきいもみたいにホカホカになって、ぼくもだれかにやさしくしたいと思える。ぼくがお母さんにちゆういされると、みゆちゃんはなぐさめてくれる。そういうときのみゆちゃんはじゆう電き。みゆちゃんに力を分けてもらって、ぼくは元気になる。ぼくもだれかに元気をあたえたくなる。これが「しあわせのれんさ」なのかな。

生まれたときはもみじのはっぱみたいに細くてこわれそうだったみゆちゃんの手。すこしずつ大きくなってきた。いつかぼくたちも大人になって、二人とも同じくらいの大きさになるのかな。そのときもなかよしでいたい。

ぼくは夏が大すきだ。青空、海、かき氷、そしてたからもの妹に出会えた夏。みゆちゃん、生まれてきてくれてありがとう。ぼくをお兄ちゃんにしてくれてありがとう。お兄ちゃんがこんなにしたのしいものだとは知らなかったよ。みゆちゃんがいてくれるから味わえる、ぼくの生きるいみ。なにがあってもぼくがまもつてあげるよ。みゆちゃん大すき。